

未来型図書館をともにつくる！

こまつリビングラボ

【令和6年度第3回 開催報告】

1

開催概要

- 日時 : 2024年10月5日（土）13:30～16:30
- 開催場所 : 小松市役所7階会議室
- 参加者 : 82名



2

プログラム

1. 挨拶（宮橋市長・野末教授（青山学院大学教授・リビングラボコーディネーター））
2. 基本計画策定に向けた検討状況について
3. 第1回～第2回の振り返り
4. ショートレクチャー・ワーク説明
5. グループワーク（建築家になってみよう！）
6. 全体共有

3

対話内容

「ワクワクする」未来型図書館の
建築空間を考えました

対話 建築家になってみよう！

①未来型図書館の建築イメージを考える

それぞれが思い描いている未来型図書館全体の外装・内装のイメージと、その建築空間イメージに沿った図書館機能の配置（集約型や分散型）を考える。

②未来型図書館全体での建築空間イメージの検討

グループでどのような施設にしたいかなどの方方向性を相談し、機能の配置や建物の形状等を考える。

第3回 こまつリビングラボの開催フロー

建築家になってみよう！

未来型図書館づくりを考えるための
ショートレクチャーを実施します。

- ①【公共施設づくりについて】
事務局
②【情報や学びと空間の関係】
野末教授



- それぞれが思い描いている未来型図書館全体の外装・内装（雰囲気や素材（材質）、空間の明るさなど）のイメージを考えます。
- 未来型図書館の核となる図書館機能について、自分が考えた建築空間イメージに沿った図書館機能の配置（集約型や分散型）などについて考えます。

どんな雰囲気？



どんな材質の
イメージ？

図書館は
集約／分散？

ショートレクチャー

自己紹介

個人ワーク（建築空間イメージの検討）

未来型図書館全体のイメージの検討

- 個人ワークで考えた建築空間イメージをグループで共有し、グループでどのような施設にしたいかなどの方向性を相談し、機能の配置や建物の形状等を考えます。



グループワーク

未来型図書館の建築イメージの具体化

- それぞれの空間同士の関係（動線としてのつながりや空間としてのつながり、吹き抜けなど）や外部環境（日差しや公園など）のつながりも考えます。

機能やライブラリーテーマを記載した
カードを自由に切り貼りしながら
楽しくみんなで考えましょう！

ネーミングも
考えます

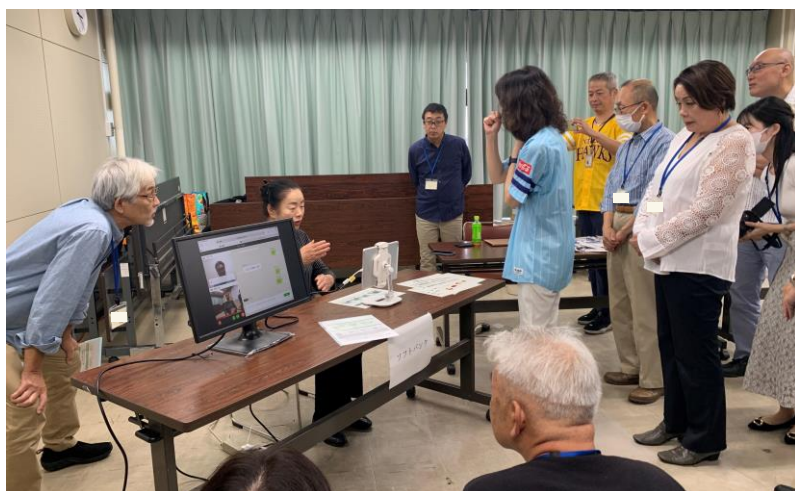


共有

開催の様子 (1)



開催の様子(2)



検討のプロセス

グループ1は、施設の外観・内観、図書館のあり方を考える上で、まずは**具体的なデザインではなく、コンセプトを時間をかけて話し合うことからスタート**しました。議論の中では「まちとのつながり」「芦城公園の環境との連続」「地域らしい素材感がある」「新しい発見が常にある場所」「行ってみたくなる場所」「開いた場所、こもれる場所、色々な場所がある」など、建築として大切にしたいことの骨子が共有されました。

具体的な提案としては「ウォーカバル」というキーワードが示すように、**まちから連続する流れが吹き抜けを介して施設全体をつなぎ（＝ウォークしながら）、その中で様々な情報や活動と出会う（＝バルのような出会いの場）、空間の連続が施設の骨格**として示されました。

階構成としては、1階は芦城公園に開いた活動的な空間、2階は沢山の本に包まれ、ゆっくり読書のできる空間、3階は閉架や収蔵など専門機能も配置する落ち着いた空間、という**動から静への断面的なゾーニング**となりました。また、**吹き抜けを巡りながら、ライブラリーテーマに沿った本に出会うことができる配架**も提案されました。

この建築イメージを実現するにあたっての課題

①

まち～公園～施設内への連続的な体験

②

様々な本や活動が共にある空間づくり

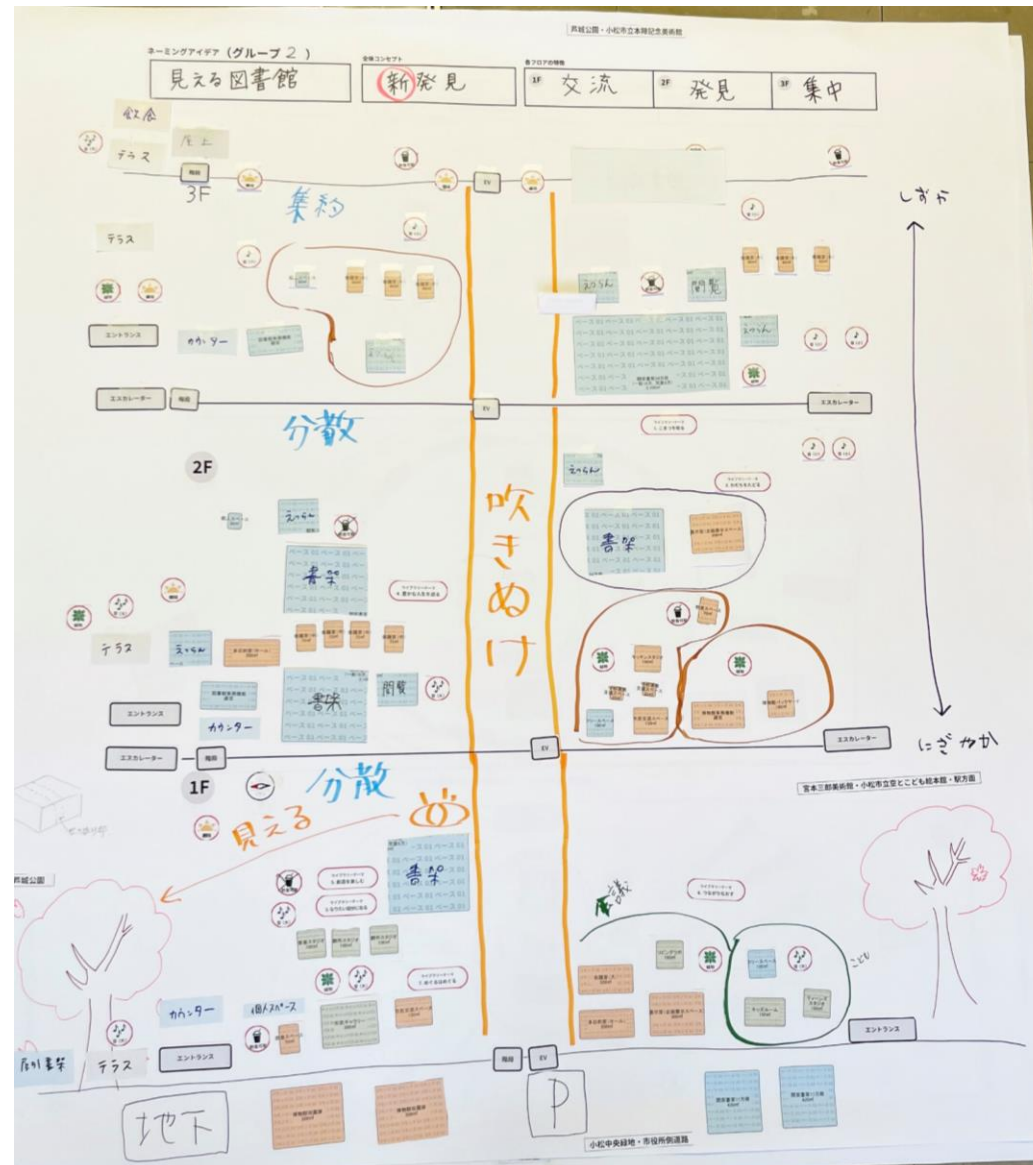
③

施設機能の再編と融合

（グループ1）

ワーク結果

グループ2



検討のプロセス

グループ2は、個人ワークでは初めは空間のイメージを言葉にすることに苦労されていましたが、石川県立図書館などの身近な事例の話やみんなでイメージ検索をするなどして、進めることができました。その中で本事業の特徴は**博物館との融合**であること、小松市民なら誰もが知る**芦城公園に立地**していることの重要性が話し合われ、グループワークにもつながっていききました。

図書館機能については活動と情報の連携を重視し**分散を基本**にしつつ、広い館内で図書に包まれる**静寂な環境も必要**なため、集約する場もつくり、**段階的に場を繋ぐ**方針となりました。

グループワークは**1階を開かれた交流の場**として芦城公園に開くことが全会一致していたため、アクティブな機能を配置し、また関連する機能同士を近くに配置することから検討を始めました。全体に関連する機能がまとまったところで、それぞれに相応しい環境を与え、近しい環境のまとまりを再配置することで、**多様な環境が共存しながらグラデーションに繋がる場**が構想されました。全体を吹抜けでつなぎ、あらゆる活動が見えることで学びや出会いを誘発するようになっています。また街から見たときに新施設が壁のように風景を遮ってしまわないよう、**吹抜けを介してまちから公園が見える**ようにしました。全体を開かれた場とするために、書庫や収蔵庫は地階とし、各階のテラスや屋上利用により**建物全体が公園**のような場としています。

この建築イメージを実現するにあたっての課題

①

屋外空間を活用するための
施設・資料運営の検討

②

適切な階数の設定
(防災・コスト等)

③

多様な活動がグラデーションに
連なるゾーニングの検討

(グループ2)

ワーク結果

グループ3



検討のプロセス

グループ3は、個人ワークにおいて、コンクリート&ガラスによるモダニズム建築から、伝統的な町家建築、小松らしさを表現したトマト型建築など、イメージが多岐に広がったため、ひとつのイメージにまとめていくのに苦戦しました。グループ全体での議論を通じて、**真ん中が吹き抜けとなりタテの空間をつなぐドーナツ型の建築に辿りつきました。真ん中の吹き抜けは平面的にも階層的にも分断せず、一体感と明るさを出したいとの思いを形にしたものです。**

フロア構成は、1階を公園に面した「にぎわい」のエリアとし、子どもや親子の居場所、カフェ、市民交流スペースなど、**多様な活動の場を設け、活動が見える、活動を感じる空間**としました。3階は「じっくり・深める」のエリアとして、図書館や博物館の資料に集中して向き合い、深く探求できる空間としています。2階はその両者をつなぐ「混じり合い」のエリアで、図書館と博物館の機能や創造的なスタジオが融合し、世代を超えた「混じり合い」を促す場としました。**これらを一体化することで、「いつでもいいよ、どこでもいいよ」といった許容する空間を目指し、全体のコンセプトを「いつどこ」と決めました。**

図書館機能としては、コンセプトに基づき、**基本は分散型**としつつ、3階「じっくり・深める」のフロアや2階「混じり合い」の**一部においては集約型も導入**する方針となりました。

この建築イメージを実現するにあたっての課題

①

音の考え方などの重要なテーマにおける熟議と合意形成のプロセス

②

建築のイメージだけではなく、建築が生み出す体験への想像と検証

③

活動と資料や展示などをどのようにつなぎ、どのように分けるのか

(グループ3)

[illegible]

検討のプロセス

グループ4は、個人ワークののち、施設全体の雰囲気や外観について意見交換されました。**スタイリッシュ**（四角くコンクリートの無機質な建物ではない）で、芦城公園の**自然とつながり、風や緑が連続**し、小松らしい石材も用いられ、外からは施設内の**賑わいが見える**ようなエリアの**アイコン**としたいという意見が出されました。

次に機能やゾーニング、雰囲気について各階ごとに話が進められました。図書館は分散型とし、各階に書架やその間にある居場所を配置することとなりました。

1階は3方向に開き、人々の活動が見通せる**賑やかな空間**とし、多目的室やリビングラボ、交流スペースなどを**融合**させた**コミュニケーションゾーン**を核にした「**まちのリビング**」に。2階は、さまざまな創造が生まれるグループワークや活動の場、「**“創”庫**」とし、博物館収蔵庫と図書館閉架書庫は3階まで吹き抜けの開放型に。3階は書架とその間や周りに多様な居場所を設けます。上階に行くにつれ動から静へ、また3階についても動から静へと音や明るさのグラデーションをつけました。

この建築イメージを実現するにあたっての課題

①

規定の各機能をコミュニケーションゾーンとして再編、融合する

②

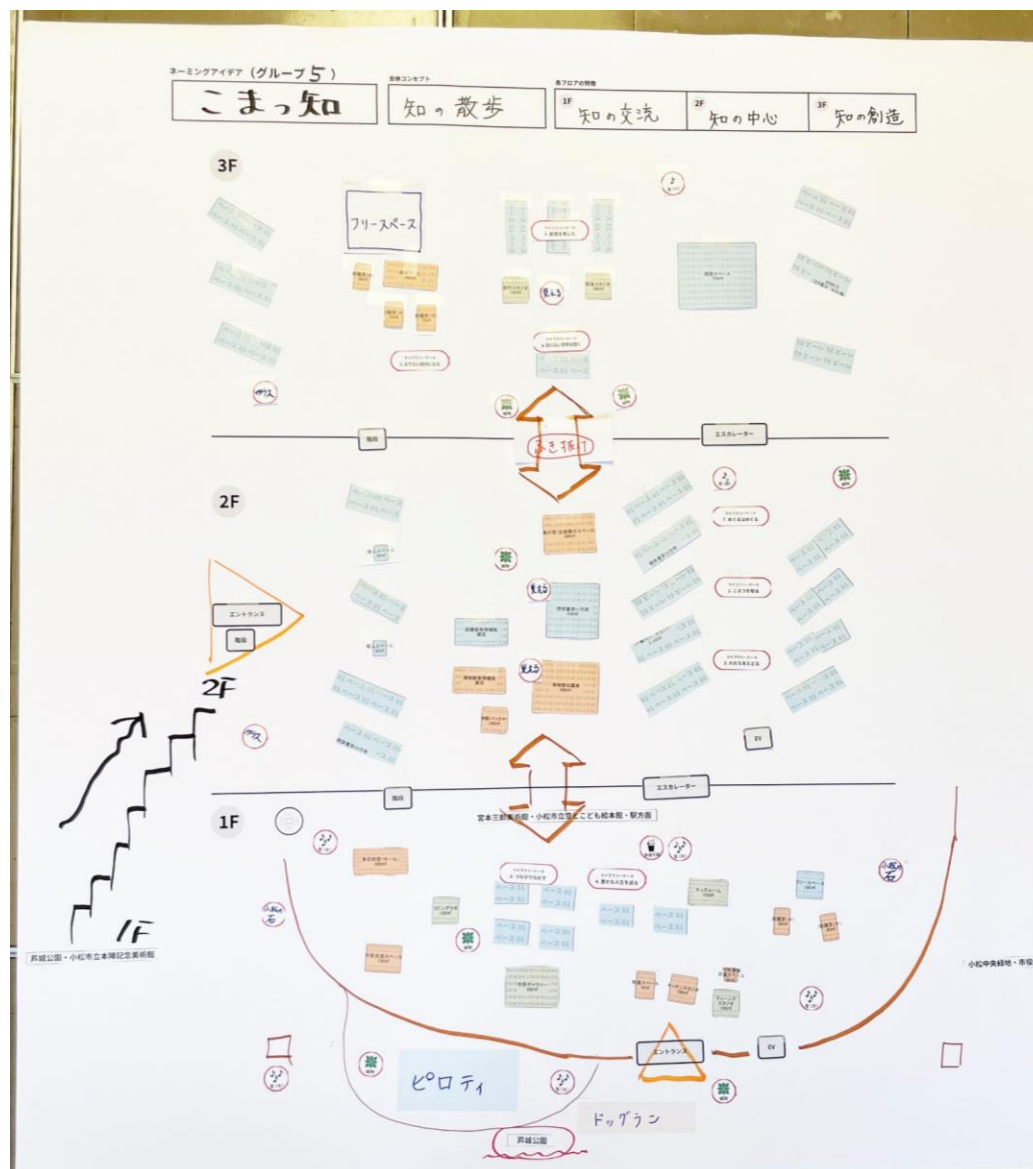
公園や絵本館とつながる動線や一体感ある景観をつくりだす
エクステリア

③

人々の過ごし方に応じて工夫される多様な居場所

（グループ5）

グループ5



検討のプロセス

グループ5では、個人ワークの共有の際に、**公園とのシームレスな空間、明るさやにぎやかさについては目的に合わせメリハリをつける**など、それぞれのイメージでも共通する部分や共存可能な要素が多々ありそうであるということが確認されました。また、図書館機能については、分散型をイメージするメンバーが多数を占めつつ、一部集約している箇所があっても良いのではないか、という意見が出ました。これらを踏まえ、**フロアごとにグラデーションをつけながら、かつ施設内での回遊性を持たせていく**ということを念頭に検討が進みました。

芦城公園を含め施設全体で散歩ができるようなイメージをグループ5の施設の全体のコンセプトとし、2階にメインのエントランスを置くことで、1階へも2階へも利用者の動きを誘導できるかたちに、また、中央部分を吹き抜けにすることで**各フロアの機能や活動が見える工夫**を検討しました。1階は公園に開けた屋根のあるピロティとドッグランを設け、飲食も可能な賑やかな憩いの空間に、2階には公開の閉架書庫や博物館機能を配置しました。3階は創作や表現をできる機能（部屋）を外から見えるかたちで配置することで、比較的静かなエリアとしながらも活動が起こり、それが常に見える空間として検討しています。

この建築イメージを実現するにあたっての課題

①

施設全体への
回遊性の工夫の検討

②

活動が見える
空間整備

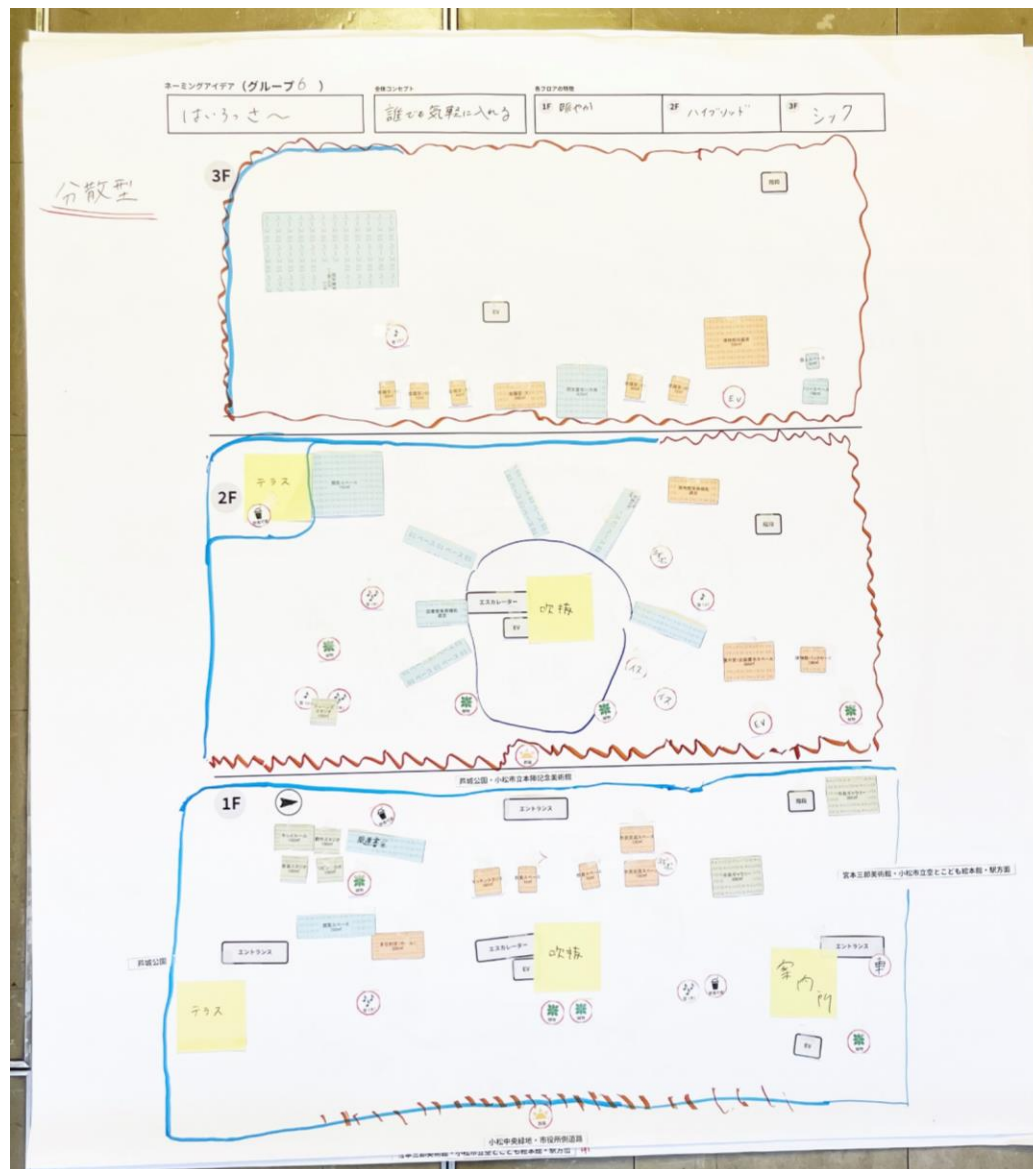
③

公園との一体化についての
工夫の検討

(グループ5)

ワーク結果

グループ6



検討のプロセス

グループ6は、個人ワークの全体共有の際に、**明るさやにぎやかさについてゾーンごとにメリハリをつけること、木造とガラスを併用し居心地のよい空間を演出することなど、それぞれの希望を組み合わせることで皆の多様な希望を叶える**という大方針を確認しました。図書館機能については、**分散型が多数**を占めつつ、一部集約している箇所があっても良いという意見が出ました。

1階は活動をオープンに魅せていく、2階は静けさと賑やかさの双方を共存させる、3階は落ち着いた空間とすることを基本としました。また、1階では児童がキッズルームで遊び、2階は中高生が活動し、3階は大学生や社会人が勉強・仕事するといったように、人生の階段を上るように成長していくという縦のつながりを意識しました。さらに、市民ギャラリーと博物館を展示機能と位置付けて2階で隣接させました。以上のように、**フロアごとにグラデーションをつけながら、かつ施設内での回遊性を持たせていく**ということを念頭に検討が進みました。

その他、出入り口を3か所設ける（公園との一体化）、テラスを設ける（桜の景観）、曜日ごとにスペースの利用目的（自習用と議論用等）を使い分ける等の工夫を取り込みました。

この建築イメージを実現するにあたっての課題

①

ゾーンごとの特徴の設定

②

活動が見える
空間整備

③

公園との一体化についての
工夫の検討

(グループ6)

グループ7



検討のプロセス

グループ7には、学生、市民活動の運営担当者、公的施設関係者、大学教授が参加し、**利用者視点に加え、施設運営の視点からも実用的な意見**が交わされました。

シンボリックな建造物を望む意見や、建物自体のハードへの投資を抑え、そこで生まれる活動（ソフト面）に費用を集中させるべきなど相反する意見もでる中、全員に一致していた**施設の核は市民の活動である**というテーマから、施設の中心に活動拠点としてリビングラボを配置し、図書館や博物館と接続することで、**多様な活動や情報が融合する「リビング」の空間が浮かび上がりました**。**ガラス張りで活動が見えるデザインや、入った際の驚きを感じさせる演出**も検討されました。

空間の区分は、**音環境の設計からどのような機能を配置するとよいか**を議論し、活動エリアと読書・学習エリアを区別し、賑わいと静けさの両立が図られ、1階では芦城公園側を静かなエリア、反対側を世代間交流の賑やかなエリアとし、**世代を超えた交流が生まれるような機能配置**が反映されました。

施設内外にはボルダリングやスケートボードエリアなどが提案され、市役所を含む**市民サービスの中心として、世代間交流の場を提供する案**が示されました。

この建築イメージを実現するにあたっての課題

①

環境との調和

②

収蔵スペースの
効率的な配置と拡張性

③

収蔵スペースの適切な
環境管理

第3回の結果整理

各グループで検討した建築空間イメージの特徴は以下の通りです。これらを踏まえて、未来型図書館の建築空間を具体化していきます。

グループ1	ネーミング: ウォーカバル	全体コンセプト: 巡る、出会う
書架	各フロアの特徴	
分散型	1F: まちとつながる 芦城公園に開いた活動的な空間 2F: 本に包まれる 沢山の本に包まれ、ゆっくり読書のできる空間 3F: 落ち着きある 閉架や収蔵など専門機能も配置する落ち着きのある空間	
大切にしたこと		検討した空間の工夫や特徴
「まちとのつながり」「芦城公園の環境との連続」「地域らしい素材感がある」「新しい発見が常にある場所」「行ってみたくなる場所」「開いた場所、こまれる場所、色々な場所がある」		- 動から静への断面的なゾーニング - 吹き抜けを巡りながら、ライブラリーテーマに沿った本に出会うことができる配架

グループ2	ネーミング: 見える図書館	全体コンセプト: 新発見
書架	各フロアの特徴	
分散を基本にしつつ 一部集約	1F: 交流 開かれた交流の場として芦城公園に開き、アクティブな機能を配置 2F: 発見 3F: 集中	
大切にしたこと		検討した空間の工夫や特徴
- 博物館との融合と芦城公園内の立地を意識 - 活動と情報の連携を重視し段階的に場を繋ぐ		- 多様な環境が共存しながらグラデーションに繋がる場 - 吹き抜けで全体をつなぎ、あらゆる活動が見えることで学びや出会いを誘発するとともにまちから公園が見えるようにする - 書庫や収蔵庫は地階とし、各階のテラスや屋上利用により建物全体が公園のような場

第3回の結果整理

グループ3	ネーミング: いつどこ	全体コンセプト: いつでもどこでも
書架	各フロアの特徴	
分散型を基本にしつつ 一部集約	1F:賑わい 多様な活動の場を設け、活動が見える、活動を感じる空間 2F:混じり合い 図書館と博物館の機能や創造的なスタジオが融合し、世代を超えた「混じり合い」を促す 3F:じっくり深める 図書館や博物館の資料に集中して向き合い、深く探求できる空間	
大切にしたこと		検討した空間の工夫や特徴
「いつでもいいよ、どこでもいいよ」といった許容する空間		真ん中が吹き抜けとなりタテの空間をつなぐドーナツ型の建築。吹き抜けは平面的にも階層的にも分断せず、一体感と明るさを出したいとの思いを形にした。

グループ4	ネーミング: みんなのおうち	全体コンセプト: 共創
書架	各フロアの特徴	
分散型	1F:町のリビング 3方向に開き、人々の活動が見通せる賑やかな空間で、多目的室、リビングラボ、交流スペースなどを融合させたコミュニケーションゾーンを核とする 2F:『創』庫 さまざまな創造が生まれるグループワークや活動の場 3F:町の書斎 書架とその間や周りに多様な居場所を設ける	
大切にしたこと		検討した空間の工夫や特徴
スタイリッシュ(四角くコンクリートの無機質な建物ではない)で、芦城公園の自然とつながり、風や緑が連続し、小松らしい石材も用いられ、外からは施設内の賑わいが見えるようなエリアのアイコンとしたい。		- 博物収蔵庫と図書館閉架書庫は3階まで吹き抜けの開放型 - 上階に行くにつれ動から静へ、また3階についても動から静へと音や明るさのグラデーションをつけた

第3回の結果整理

グループ5	ネーミング: こまっ知	全体コンセプト: 知の散歩
書架	各フロアの特徴	
分散型を基本にしつつ 一部集約	1F: 知の交流 公園に開けた屋根のあるピロティとドッグランを設け、飲食も可能な賑やかな憩いの空間とする 2F: 知の中心 メインのエントランスを置くことで、1階へも2階へも利用者の動きを誘導 3F: 知の創造 公開の閉架書庫や博物館機能を配置。3階は創作や表現をできる機能(部屋)を外から見えるかたちで配置	
大切にしたこと		検討した空間の工夫や特徴
- 公園とのシームレスな空間 - 明るさやにぎやかさについては目的に合わせメリハリをつける		- 各フロアの機能や活動が見えるよう中央部分を吹き抜けにする - フロアごとにグラデーションをつけながら、かつ施設内での回遊性を持たせていく

グループ6	ネーミング: はいろっさ～	全体コンセプト: だれでも気軽に入れる
書架	各フロアの特徴	
分散型を基本にしつつ 一部集約	1F: 賑やか 活動をオープンに魅せていく 2F: ハイブリッド 静けさと賑やかさの双方を共存させる 3F: シック 落ち着いた空間とする	
大切にしたこと		検討した空間の工夫や特徴
- 明るさやにぎやかさについてゾーンごとにメリハリをつける - 木造とガラスを併用し居心地のよい空間を演出する		- 人生の階段を上るように成長していくという縦のつながりを意識 - 出入り口を3か所設ける(公園との一体化)、テラスを設ける(桜の景観)、曜日ごとにスペースの利用目的(自習用と議論用等)を使い分ける等

第3回の結果整理

グループ7	ネーミング:こまつリビング(こまつリビ)	全体コンセプト:市民の力を中心とした施設
書架	各フロアの特徴	
分散型	1F:静かな場と賑やかなへのグラデーションのある場 芦城公園側を静かなエリア、反対側を世代間交流の賑やかなエリア 2F:リビングラボを中心に図書館機能と博物館機能がなる 3F:リビングラボの活動を考えたりする場としての会議室などがある	
大切にしたこと		検討した空間の工夫や特徴
施設の核は市民の活動である		- 施設の中心に活動拠点としてリビングラボを配置し、図書館や博物館と接続することで、多様な活動や情報が融合する「リビング」の空間 - ガラス張りで活動が見えるデザインや、入った際の驚きを感じさせる演出 - 市役所を含む市民サービスの中心として、世代間交流の場を提供する